

Title	「越境文化研究イニシアティブ」について
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	越境文化研究イニシアティブ論集. 3 p.1-p.5
Issue Date	2020-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75553
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「越境文化研究イニシアティブ」について

宇野田 尚哉

ここに発行するのは、大阪大学大学院文学研究科越境文化研究イニシアティブの論集である。本研究グループの前身である同研究科グローバル日本研究クラスターの報告書がすでに2冊（2017年度の第1集と2018年度の第2集）発行されているので、それを引き継いで本論集は第3集としているが、本研究グループとしては最初の論集となる。ここではまず、本研究グループとその活動について紹介したうえで、本論集について簡単に説明しておくこととしたい。

本研究グループは、大阪大学大学院文学研究科内に2014年度に設けられた「国際的社会連携型人文科学研究教育クラスター（Global Linkage Clusters for Humanities）」（略称「人文学クラスター（GLinCH）」）の1つであるグローバル日本研究クラスターを前身としている。この人文学クラスターは、従来の専門分野の枠にとらわれない研究組織として、(1)国内外の大学、研究教育機関、学術芸術機関、自治体等と共同して、分野横断的な新しい人文科学研究の拠点形成を行うこと、(2)個別に行われてきた国際的な研究交流を文学研究科が支援するとともに、研究科内に組織化することによって可視化し、個の力を組織の力に高めること、などを目的としていた。この人文学クラスターの1つとして設けられたグローバル日本研究クラスターは、既存の枠組を横断するプロジェクト型の研究組織として、海外の日本研究者と緊密なネットワークを構築しつつ研究教育にあたることで、①本研究科の日本研究のグローバル化と、②本研究科の日本研究領域の大学院教育のグローバル化を図るとともに、③本研究科が日本研究領域の世界的拠点として認知されることを目指して、活動した。

第1期（2014～2016年度）・第2期（2017～2018年度）の5年間にわたる人文学クラスターの活動期間が終了したのち、その事業を国際性の醸成と研究力の強化に特化したかたちで継承したのが、2019年度に始まる同研究科の「国際共同研究力向上推進プログラム」であり、越境文化研究イニシアティブはこのプログラムに採択された研究プロジェクトである。本研究グループは、グローバル日本研究クラスターの組織やネットワーク、活動目的を継承しつつ、国際共同研究力の向上に従来よりも注力するかたちで、2019年度から活動を開始した。当面の活動期間は2019年度・2020年度の2年間であり、2019年度の構成員は、宇野田尚哉（代表、文学研究科教授）、三谷研爾（文学研究科教授）、飯倉洋一（文学研究科教授）、

斎藤理生（文学研究科准教授）、平田由美（文学研究科教授）、ニコラス・ランブレクト（文学研究科助教）、細見和之（京都大学教授）、坪井秀人（国際日本文化研究センター教授）、川口隆行（広島大学准教授）、鳥羽耕史（早稲田大学教授）、逆井聡人（東京外国語大学特任講師）、鈴木暁世（金沢大学准教授）、ユーディット・アーロカイ（ハイデルベルク大学教授）、ハンス・クレーマ（ハイデルベルク大学教授）、アン・シェリフ（オーバリン大学教授）、クリスティーナ・イ（ブリテッシュ・コロンビア大学助教）、キャサリン・リュウ（ミシガン州立大学准教授）、崔範洵（嶺南大学准教授）、申知瑛（延世大学助教）である。

本研究グループは、グローバル日本研究クラスターの活動のなかで形成された複数のネットワークを継承するかたちで存立している。その軸になっているのは、ハイデルベルク大学日本学研究所との研究交流、北米の日本研究者との戦後文化運動や在日文学を主題とする研究交流、韓国の日本研究者との原爆文学を主題とする研究交流などであり、今後はそれぞれに研究成果のとりまとめ方について検討していくことになる。グローバル日本研究クラスターの活動期間における議論の蓄積については『グローバル日本研究クラスター報告書』第1集・第2集に掲載されている活動記録やシンポジウム記録等を、今年度における議論の展開については後掲の活動記録やシンポジウム記録等を参照されたい。

ここで、本研究グループの名称について説明しておく。グローバル日本研究クラスターは、「国際日本研究コンソーシアム」（国際日本文化研究センターが代表幹事機関をつとめるコンソーシアム。2017年9月正式発足。現在、大阪大学大学院文学研究科を含む14機関が加盟。<https://cgjs.jp/> 参照）が活動を始める前後の時期に、“Global Japanese Studies”を掲げて活動した。この看板を掲げて活動することによりそれまでとは異なる研究ネットワークを新たな研究水準で構築することができたと考えているが、しかし一方で、たとえ“Global”を冠したとしても“Japanese Studies”を看板としているかぎり研究交流の視野や問題設定の視座が「日本」に限定されがちになってしまい、いわばみずから限界を設けることになってしまうという問題があることをしばしば感じてきた。そこで、実態は日本研究者を中心とする組織なのではあるが、視野の拡大・視座の転換の必要性を銘記するという意図を込めて、あえて本研究グループを「越境文化研究イニシアティヴ」と名づけることとした。この点は、近年あちこちでさかんに提唱されている「グローバル日本学」「国際日本研究」の帰趨にも関わる問題であるが、グローバル日本研究クラスター以来代表をつとめている私としては、越境文化研究イニシアティヴという名称が示唆するような方向に踏み込むことで本研究グループなりの新たな展望を開きたいと考えている。

ところで、文学研究科は、2017年度以来、大阪大学全体に対して、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ（英語名 Global Japanese Studies）」(http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/academics/fukupuro_GJS)を提供している。本研究グループの代表である宇野田は同プログラムの実施責任者であり、本研究グループの中心的な構成員の一人であるニコ

ラス・ランブレクト助教は同プログラムの英語科目の担当教員であるから、本研究グループが同プログラムと実質的に深くつながっている点は、グローバル日本研究クラスターの時期と変わらない。とりわけ、2017 年度以来毎年開催している *Graduate Conference in Japanese Studies* は、本研究グループの活動の成果を日本研究領域の大学院生の教育に還元することを意図している重要な事業である。本論集でいえば、眞田英毅氏（東北大学大学院文学研究科博士後期課程在学中）の英語論文は、2018 年度に引き続き国際日本研究コンソーシアムからの支援を受けて開催した *Graduate Conference in Japanese Studies 2019* での口頭発表に基づく論文であり、本論集は同プログラムの成果報告書という性格も持っているといつてよい。

本研究グループの 2019 年度の活動については、別項の「越境文化研究イニシアティブ活動記録（2019 年度）」を参照されたい。今年度は、5 月と 6 月に国際シンポジウムを開催するとともに、機会を捉えてワークショップや講演会を開催し、研究交流の拡大と実質化に努めた。2019 年度末には、新型コロナウイルスの流行により宇野田とランブレクトが参加する予定にしていた北米での学術会議がキャンセルになるなど、本研究グループも研究計画の見直しを余儀なくされているが、2020 年度は研究成果をまとめる方向に重心を移しながら活動する予定である点に変更はない。

5 月に開催した国際シンポジウム「詩画人四國五郎の歩んだ道—シベリアからヒロシマへ—」は、大阪大学総合学術博物館の兼任教員として宇野田が企画し 2019 年 4 月 26 日から 7 月 20 日まで同館で開催した第 22 回企画展「四國五郎展—シベリアからヒロシマへ—」の関連企画として開催したものである。シベリア抑留を経験し原爆で弟を失い帰国後峠三吉らと被爆地広島で反戦平和のための文化運動を担った詩画人四國五郎については、近年国内外で関心が高まりつつあり、この企画展の時期には NHK が四國五郎に関するドキュメンタリー番組を制作しつつあった。5 月の国際シンポジウムでは近年の四國五郎再評価を担っている主要な研究者に登壇していただいたが、なかでも本研究グループの構成員であるオーバリン大学教授のアン・シェリフ氏は NHK の番組の主要な登場人物の一人であり、この国際シンポジウムの様子も 2019 年 8 月 5 日放送の「BS1 スペシャル ヒロシマの画家 四國五郎が伝える戦争の記憶」で紹介された。

また、6 月には、現代日本を代表する詩人の一人である金時鐘氏を迎え、同氏の生誕 90 年・渡日 70 年を記念する国際シンポジウムを開催した。この国際シンポジウムの記録は本論集に特集 1 として収録してあるので、詳しくはそちらを参照されたい。

そのほか、機会を捉えてワークショップや講演会を開催した。ここではその詳細は省略するが、いずれも今後の国際共同研究の展開のために有益な会合であった。ご協力を賜ったユーディット・アロカイ氏（ハイデルベルク大学教授）、上田薫氏（スタンフォード大学フーヴァー研究所キュレーター）、Andre Haag 氏（ハワイ大学助教授）にこの場をかりてお礼申し上げ

げるとともに、本論集にご寄稿くださった John Bundschuh 氏（オハイオ州立大学大学院東アジア言語文学科博士後期課程）にはとりわけ厚く謝意を表したい。

本論集第 2 部には、この Bundschuh 氏の論考、前述の眞田氏の論考のほか、前述した「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムに関係している教員・大学院生の論考を収めた。詳しくは第 2 部の Introduction を参照されたい。

越境文化研究イニシアティブ活動記録（2019 年度）

＊所属・職位はイベント開催時のもの

2019 年 5 月 19 日、国際シンポジウム「詩画人四國五郎の歩んだ道—シベリアからヒロシマへ—」開催（於大阪大学会館アセンブリーホール）。

趣旨説明・司会 宇野田尚哉（大阪大学教授）

研究発表

川口隆行（広島大学准教授）

青春の協同創作—シベリア収容所から朝鮮戦争下の広島へ—

岡村幸宣（原爆の図丸木美術館学芸員）

占領下／朝鮮戦争下の原爆表現—四國五郎と丸木位里、赤松俊子の絵画—

アン・シェリフ（オーバリン大学教授）

ベトナム戦争における芸術—四國五郎の母子像—

小沢節子（近現代史研究者）

四國五郎の 1970 年代

—「ヒロシマの画家」となるまで、あるいは「当事者性」の獲得をめぐって—

2019 年 6 月 16 日、国際シンポジウム「越境する言葉—詩人金時鐘さんの生誕 90 年と渡日 70 年を記念して—」開催（後援：大阪文学学校、藤原書店、朝日新聞社。於大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホール）

主催者挨拶 宇野田尚哉（越境文化研究イニシアティブ代表）

来賓挨拶 呉泰奎（駐大阪大韓民国総領事館総領事）

スライド上映（浅見洋子作成・上映）

基調講演「金時鐘さんがみつめてきたもの」 鶴飼哲（一橋大学特任教授）

パネルセッション「越境する言葉—金時鐘を読む—」（司会宇野田尚哉・細見和之）

「在日朝鮮人語としての日本語、その原点とゆくえ」 丁章（詩人）

「歴史を越境する詩」 宮沢剛（二松学舎大学非常勤講師）

「北米における金時鐘」 CATHERINE RYU（ミシガン州立大学准教授）

浄瑠璃による『猪飼野詩集』:「うた またひとつ」 渡部八太夫 (人形浄瑠璃猿八座太夫)
金時鐘さんによる朗読とスピーチ
閉会のあいさつ 葉山郁生 (大阪文学学校代表理事)

2019年6月19日, 国際ワークショップ「猪飼野女性文学ワークショップ」開催 (於喫茶美術館)

My Encounters with Chong Ch'u-Wöl and Her Poetry: Three Impressions

CATHERINE RYU (Michigan State University)

ディスカッサント: 丁章 (詩人)

2019年10月3日, トークセッション「能の魅力ー日本とヨーロッパ, 過去と現在ー」(於芸3教室)

発題: ユーディット・アーロカイ (ハイデルベルク大学教授)・中尾薫 (文学研究科准教授)

コメンテーター: 古後奈緒子 (文学研究科准教授)

司会: 三谷研爾 (文学研究科教授)

2019年10月23日, 講演会「日系関連の最近のアーカイブスの動向」(於待兼山会館会議室)

講師 上田薫 (スタンフォード大学フーヴァー研究所ジャパニーズ・ディアスポラ・コレクションキュレーター)

2019年12月23日, **Global Japanese Studies Research Workshop: The View from Japan: Discourses on Korea and Migration in Japanese Literature** 開催 (於中庭会議室)

Colonial Paranoia, Parody, and “The Korea Problem”: The Migrating Terms, Texts, and Terrors of Koreaphobia in Imperial Japanese Literature and Culture

ANDRE HAAG (Assistant Professor of Japanese Literature, Department of East Asian Languages and Literatures, University of Hawai'i)

No Place for Returns: Ri Kaisei's Past and Present Sakhalins

NICHOLAS LAMBRECHT (Assistant Professor of Global Japanese Studies, Graduate School of Letters, Osaka University)

Discussion: Hashimoto Yorimitsu (Professor of Comparative Literature, Graduate School of Letters, Osaka University)

2020年1月14日, **Global Japanese Studies Research Workshop** 開催 (於中庭会議室)

Rethinking Japan's Earliest Written Narratives

JOHN BUNDSCHUH (Visiting Fulbright-Hays Fellow, The Ohio State University)